

《研究報告》

成人（基礎）看護領域における看護総合臨床実習の学びと課題 —レポートの分析を通して—

漆坂真弓¹⁾, 木村紀美¹⁾, 村田千代¹⁾, 中村令子¹⁾,
原田真里子¹⁾, 新田純子¹⁾, 長内志津子¹⁾

要旨：本研究の目的は、看護総合臨床実習成人（基礎）看護領域での学生の学びの内容と到達目標の達成度を明らかにし、今後の課題について検討することである。対象は、A大学看護学部4年生のうち、看護総合臨床実習成人（基礎）看護領域で実習を行った学生25名であった。「実習計画書」「看護総合臨床実習レポート」をもとに実習での学びと課題について分析した。

その結果、①学生は患者に起こっている現実や必要とされる援助の実際について学んでいた。②医療チームの役割について理解した学生は、次の段階として「患者の望む治療やケアが実現できるように協働するにはどうしたらいいのか」といった実践レベルでの目標を見いだしていた。③看護師としての姿勢・態度での学びは、学生に自分自身を振り返るきっかけを与え、自主性や周囲への配慮の欠如といった自己の気づき、看護師として自己研鑽の必要性の気づきに繋がっていた。④複数患者を支持体験によって、時間の使い方、優先順位の判断、個々の患者への対応や観察の仕方の学びを得ていた。課題としては、実習前の準備の検討、評価表の見直しがあげられた。

キーワード：看護総合臨床実習、自主性、知識と技術の統合

はじめに

医療の高度化に伴い、医療サービスを受ける国民の権利意識や医療安全に対する意識が向上し、看護の場においてより安全で質の高い看護の提供が求められている。これからの看護を担う学生においても、人々がより健康的な生活を送れるように必要となる看護のニーズに応えていく実践能力を身につけていく必要がある。このような現状の中、医療を担う人材の確保と資質の向上を図る観点から、看護基礎教育の内容の見直しがなされ、平成19年4月に「看護基礎教育の充実に関する検討会報告書」が発表された（看護基礎教育の充実に関する検討会、2007、厚生労働省ホームページ）。これによると、看護師教育の課題に、看護基礎教育で修得する看護技術と臨床現場で求められるものとの間にギャップがあること、臨床現場では複数患者を受け持ち、様々な作業を同時に行わなければならない

いことなどが指摘され、学生の看護実践能力を強化していく必要があることが述べられている。報告書では、カリキュラムに統合分野という新しい分野を設けて、より臨床実践に近いかたちで知識と技術の統合を図っていくことなどが示されている。これらの提案は、2009年度から新カリキュラムとして導入され、現在、各教育機関によりそれぞれに教育内容の見直しや検討がなされている。

A大学においては新カリキュラム導入に先駆けて「自主的に実務に即した実習を行い、看護実践に必要な知識と技術を統合的に体験すること、自主的に学ぶ体験を通して、自己研修力を高め、科学的根拠に基づいた看護を実践できる基礎的能力を養うこと」をねらいに、4年次に看護総合臨床実習を行った。看護総合臨床実習は、これまでの領域別臨地実習とは異なり、自己研修力を高めること、実務に即した実習を行うこと、医療チーム内での連携や協働を学ぶこと、そして、

1) 弘前学院大学看護学部

連絡先：漆坂真弓 〒036-8231 弘前市稔町20-7

TEL: 0171-31-7156, FAX: 0172-31-7101, E-mail: urushi-m@hirogaku-u.ac.jp

看護専門職者としての職業観と倫理観を培うことを目的としている。

成人（基礎）看護領域では、看護総合臨床実習の概要と到達目標に則り、教員の指導のもと、学生が実習目標及び実習内容を計画し、実習を行った。看護総合臨床実習では、学生自身の課題や目標に沿って、学生の自主性・主体性を引き出すかたちでの実習を展開した。そこで本研究では、今後さらなる実習内容の充実を図るために、看護総合臨床実習における成人（基礎）看護領域での学生の学びや課題を明らかにすることを目的とした。

成人(基礎)看護領域における看護総合臨床実習の概要

成人（基礎）看護領域の看護総合臨床実習は、学生が実習の計画を行う準備時期から始まり、実習病棟との調整、実習の展開、実習最終日のグループワーク、実習レポートによる学びのまとめから成る。実習の準備期間はおよそ4ヶ月あるが、その間に領域別実習や講義などが入るため、それ以外の時間で行っている。

成人（基礎）看護領域の実習の構成は、周手術期患者の看護、がん患者の看護、急性期患者の看護、慢性期患者の看護の4つの実習内容からなる。これらの中から学生が一つを選択する。学生は、教員の指導・助言のもと、看護総合臨床実習の概要及び到達目標に則って自己の実習課題を明らかにし、実習内容を計画するにあたり実習計画書を作成した。実習計画書には、課題を達成するための実習目標、実習目標を達成するための到達目標、実習内容、実習方法、記録様式などを記載し、その計画書に沿って実習が展開できるように綿密に立てた。実習病棟へ実習計画書に基づいた実習内容の説明は学生が行うが、事前に実習の目標やねらい、どのような実習を行いたいのか、実習病棟に協力して欲しい内容などについて、教員の指導や助言を受けてから行った。

成人（基礎）看護領域の実習のまとめとして、看護総合臨床実習レポートを課している。レポートは、自己の実習課題を達成するためにどのような実習を行ったのか、実習を通してどのような学びや新たな課題が得られたのかについて記載し、看護総合臨床実習での学びについてまとめたものである。

実習の評価方法は、実習評価表を用いて行った（表1）。実習評価表は「実習前の準備：7項目」「看護の

実践：11項目」「実習のまとめ：7項目」の3つの枠組みからなる。評価基準は「1点：助言を受けてもできないことがある」「2点：数回の助言でできる」「3点：1回の助言でできる」「4点：学生一人の力でできる」で、学生及び教員がそれぞれ評価を行った。

研究目的

平成20年度の看護総合臨床実習 成人（基礎）看護領域での学生の学びの内容と到達目標の達成度を明らかにし、今後の課題について考察する。

研究方法

1. 研究期間

平成21年1月～2月

2. 研究対象

A大学看護学部4年生のうち、平成20年度看護総合臨床実習 成人（基礎）看護領域で実習を行った学生25名

3. データ収集方法

研究目的・方法について口頭及び文書にて説明し、研究協力が得られた学生の看護総合臨床実習で提出された記録物「実習計画書」「看護総合臨床実習レポート」からデータ収集を行った。データ収集に際し、一度記録物をコピーした後、そのコピーした記録用紙に記述されている固有名詞を全て削除し、再度コピーした。この作業の後、最初にコピーした固有名詞が記述されている記録物は直ちに裁断処理した。

4. 分析方法

得られたデータはそれぞれ以下の過程に沿って分析を行った。

1) 看護総合臨床実習に臨むにあたっての学生の実習目標は、看護総合臨床実習の概要及び到達目標の視点から内容をまとめ分析した。この作業は2名によって行い、その後成人看護教員によって分析の妥当性について検討した。

2) 実習目標を達成するための到達目標については、記述されている内容についてまとめ分析した。この作業についても2名によって行った後、成人看護教

表 1. 実習評価表

		評価項目
実習前の準備	課題 実習	1. 実習課題として取り組みたいことについて進んで文献学習をすることができる
		2. 自己の実習課題を、その理由や根拠を含めて文章にして表現することができる
	立案 実習計画	3. 実習課題を達成するための到達目標を具体的に述べるることができる
		4. 実習課題を達成するために、実習の内容を具体的に計画することができる
		5. 実習を進めるにあたり、倫理的配慮について述べるることができる
	打合せ 実習の	6. 自己の実習課題と実習計画について説明することができる
		7. 実習計画に基づき実習内容（患者選定、カンファレンス等）について調整できる
看護の実践	実習の展開	8. 実習課題の達成に向け、自主的に知識や技術を習得することができる
		9. 健康障害を抱える対象の特徴を述べるることができる
		10. 健康障害による心身及び生活への影響について述べるることができる
		11. 看護問題とその根拠を明らかにすることができる
		12. 看護援助の基本や根拠を踏まえ、安全・安楽に看護援助を行うことができる
		13. 倫理的配慮をした上で看護援助を行うことができる
		14. 対象の反応を確かめながら看護援助を行うことができる
		15. 看護援助の結果を評価することができる
		16. 実習を行った領域（例：がん患者の看護）の看護の特徴を述べるることができる
		17. 医療チームにおける自分（看護師）の役割について述べるることができる
		18. 医療チームの中で、自分（看護師）の役割を果たすことができる
実習のまとめ	学内	19. グループメンバーの意見を聴き、自分の意見を発言することができる
		20. グループワークに積極的に参加することができる
	レポート	21. 書き方に基づき実践内容とその根拠を明らかにしながらまとめることができる
		22. 自己の実習課題の評価について客観的に述べるることができる
		23. 実習を通して学んだ看護観について述べるることができる
		24. 実習を通して学んだ倫理観について述べるることができる
		25. 期日を厳守し、レポートや記録を提出することができる

【評価基準】1点：助言を受けてもできないことがある 2点：数回の助言でできる
3点：1回の助言でできる 4点：学生一人の力でできる

員により分析の妥当性について検討をした。

3) 「看護総合臨床実習レポート」は、看護総合臨床実習での学生の学びと今後の課題について記述している部分を取り出し、学びや課題の意味の類似している内容ごとに分析をした。この作業を2名で行い、その後成人看護教員による分析の妥当性について検討を行った。

5. 倫理的配慮

研究対象者には、研究協力を依頼するに際し、研究目的・方法について口頭及び文書にて説明を行い、研究の同意を得てから行った。研究への参加は自由意思によるものであり、断ることも可能であること、例えば研究の途中であっても研究協力の撤回が可能であることを説明した。その際、研究者は直ちに中止し、得ら

れたデータを破棄すること、研究協力を断ったとしても、授業や成績等に何ら不利益が生じないことを説明した。研究で得られたデータに関しては、個人と施設が特定されないかたちで分析を行い、本研究以外で使用しないこと、研究が終了した時点で裁断破棄することを伝えた。さらに、研究結果については論文発表を行い、その際、決して個人や施設が特定されないかたちで発表することを説明した。尚、本研究は、弘前学院大学倫理委員会の審査を受けた。

結 果

1. 実習の実際

協力が得られた学生は25名であった。周手術期患者の看護：3名、がん患者の看護：7名、急性期患者の

表2. 実習目標

項目	件数
知識と技術の統合による質の高い看護を実践する	25
科学的根拠に基づいた看護実践を行う	9
関連職種との連携・協働の必要性を理解する	3
看護師の役割を理解する	3
医療チームの役割・あり方を理解する	2
実務に即した実習を行う	2
看護観・倫理観を培う	2
自己研修力を高める	1

看護：7名，慢性期患者の看護：8名であり，学生全員が看護過程を行った。患者1名を受け持った学生は10名，2～3名の患者を受け持った学生は15名であった。

2. 実習目標について

「実習計画書」に記載されていた実習目標について，看護総合臨床実習の概要及び到達目標の視点から内容をまとめた。その結果，実習目標には8つの項目が掲げられていた（表2）。実習目標の総数は47件であった。「知識と技術の統合による質の高い看護を実践する」は学生全員が掲げており，次に「科学的根拠に基づいた看護実践を行う」が多かった。学生25名中15名の学生は複数（2～4）の実習目標を掲げていた。

3. 到達目標について

「実習計画書」に記載されていた到達目標は，理解するレベルと実践するレベルの2つの到達点の視点からあげられていた（表3-1, 表3-2）。【理解レベル】の到達目標数は36件，【実践レベル】の到達目標数は51件，合計87件の到達目標があげられていた。22名の学生は複数（2～7）の到達目標を掲げていた。

【理解レベル】の到達目標は，「対象（周手術期患者，がん患者，急性期患者，慢性期患者）に応じた看護の理解」「医療チームの理解」「看護師としての姿勢・態度」の3つに分類された。【理解レベル】の到達目標の総件数36件のうち，24件が「対象に応じた看護の理解」であり，『対象の理解（身体的/心理的/社会的側面・ニーズ）』や『症状及び緩和方法の理解』など，看護の知識と看護援助技術に関する内容であった。その他「医療チームの理解」については10件，「看護師としての姿勢・態度」については2件の到達目標が立てられ

ていた。

【実践レベル】の到達目標は，「対象（周手術期患者，がん患者，急性期患者，慢性期患者）に応じた看護の実践」「医療チームメンバーとしての役割・協働」「看護師としての姿勢・態度」「実務に即した実践」の4つに分類された。【実践レベル】の到達目標の総件数51件のうち，46件が「対象に応じた看護の実践」で，その内容は『アセスメント（身体的/心理的/社会的側面・症状）ができる』や『観察（身体的/心理的状態・症状・徴候）ができる』『コミュニケーション（受容的共感的態度・傾聴・タッチング・環境への配慮）の実践』といった，看護の知識を活用し，看護援助を実践する内容であった。その他「医療チームメンバーとしての役割・協働」が2件，「看護師としての姿勢・態度」が2件，「実務に即した実習」が1件，到達目標として立案されていた。

先に実習目標としてあげられていた「看護観・倫理観を培う（2件）」「自己研修力を高める（1件）」は，具体的な到達目標があげられていなかった。そのため，何をもって実習目標が達成されたと考えられるのかが不明確であった。また，「実務に即した実習を行う（2件）」についての到達目標は1件のみであった。

4. 実習の学びについて

「看護総合臨床実習レポート」に記載されていた実習の学びは総件数72件があげられ，「看護実践」「医療チームの役割」「実務に即した実習」「看護師としての姿勢・態度」の4つに分類された（表4-1）。

「看護実践」の実習の学びの件数が52件と最も多かった。その内容には，“客観的データから対象の全身状態を把握し理解することを学んだ”“治療を受けている患者の不安の強さを知った”といった『対象の理解』

表3-1. 到達目標【理解レベル】

項 目	件数
■対象（周手術期患者・がん患者・急性期患者・慢性期患者）に応じた看護の理解	〈24〉
対象の理解（身体的/心理的/社会的側面・ニーズ）	6
症状及び緩和方法の理解	4
看護の特徴の理解	3
合併症・二次障害及びその予防方法の理解	2
障害の理解（日常生活への影響・受容過程）	2
リハビリの理解（早期リハビリの重要性・意欲の個別性）	2
家族の理解（機能・役割・心理的側面）	2
行動支援の仕方の理解	1
身体的・心理的側面への援助の理解	1
治療の理解	1
■医療チームの理解	〈10〉
他職種・看護師間との協働と連携の理解	5
看護師の役割の理解	5
■看護師としての姿勢・態度	〈2〉
看護師としての姿勢・態度・あり方の理解	2

表3-2. 到達目標【実践レベル】

項 目	件数
■対象（周手術期患者・がん患者・急性期患者・慢性期患者）に応じた看護の実践	〈46〉
アセスメント（身体的/心理的/社会的側面・症状）ができる	9
観察（身体的/心理的状態・症状・徴候）及び情報収集ができる	7
コミュニケーションの実践（受容的共感的態度・傾聴・タッチング・環境への配慮）	5
看護技術（日常生活援助含む）の実践	4
リハビリの実践（自立に向けた機能訓練・残存機能の活用）	4
症状への援助（症状緩和・症状改善・症状コントロール）ができる	4
科学的根拠に基づいた看護実践を行う	3
家族への看護の実践（支援・信頼関係の構築）	3
QOLを考慮した看護実践を行う	2
個別性を活かした看護実践を行う	2
倫理に沿った看護実践を行う	1
二次的障害の予防ができる	1
セルフケアへの援助ができる	1
■医療チームメンバーとしての役割・協働	〈2〉
医療チームの一員として協働する	1
報告をする	1
■看護師としての姿勢・態度	〈2〉
事前学習を行う	1
倫理的配慮（プライバシー保護・患者主体）ができる	1
■実務に即した実践	〈1〉
感染予防対策を行う	1

や、“患者が何を考え、何を伝えようとしているのか、積極的に話しかけて関わりを持つことが大切”といった『コミュニケーションの実践』、“フィジカルアセスメント技術について学んだ”といった『看護技術の実践』などの7項目があげられていた。

「医療チームの役割」の実習の学びは11件で、その

内容は、“患者の状態を観察して気づいたことを、医療チームの一員として、他職種と情報交換し共有していくことが大切”といった『他職種との連携・協働の理解』、“自分の意志を相手に正確に伝えられるコミュニケーション能力の重要性に気づいた”のような『スタッフとのコミュニケーションの重要性』などの5項

表4-1. 実習の学び

項 目	件数
■看護実践	〈52〉
対象の理解	13
コミュニケーションの実践	11
看護技術の実践	7
自立に向けた援助の実践	6
看護の特徴の理解	6
個別性を捉える実践	5
知識の習得・活用	4
■医療チームの役割	〈11〉
他職種との連携・協働の理解	6
チームメンバーとのコミュニケーションの重要性の理解	2
看護師の役割の理解	1
看護師間の連携の理解	1
チームの一員としての自覚	1
■実務に即した実習	〈4〉
優先順位を考えて行動すること	4
■看護師としての姿勢・態度への課題	〈5〉
責任への意識	2
学ぶ姿勢	2
死生観	1

表4-2. 今後の課題

項 目	件数
■看護実践への課題	〈28〉
看護技術を身につける	7
情報収集・アセスメント能力を身につける	5
個別性を考慮した看護計画の立案・実践	5
知識を身につける	4
全体像をとらえる広い視野を身につける	4
判断力を身につける	2
患者との信頼関係を構築する	1
■医療チームの役割への課題	〈2〉
他職種との連携・協働の仕方	1
医療チームメンバーとのコミュニケーションの取り方	1
■実務に即した実習への課題	〈2〉
行動の優先順位の判断の仕方	2
■看護師としての姿勢・態度への課題	〈7〉
看護援助時に配慮・気づかいをすること	3
自主的に行動すること	2
自己研鑽への気づき	2

目あげられていた。

「実務に即した実習」の実習の学びは4件であった。その内容は“看護師は時間内で優先順位を考えながら行動することを知った”といった『優先順位を考えて行動すること』であった。

「看護師としての姿勢・態度」の実習の学びは5件であり、“自分が受け持ち患者の責任を持つことを意識した”といった『責任の意識』などの3項目が含まれていた。

5. 今後の課題について

「看護総合臨床実習レポート」に記載されていた今後の課題には、総件数39件があげられ、「看護実践への課題」「医療チームの役割への課題」「実務に即した実習への課題」「看護師としての姿勢・態度」の4つに分類された(表4-2)。

「看護実践への課題」は28件があげられていた。その内容は、“患者の状況によってコミュニケーション手段を工夫することで、患者のニーズをもっと知ることができ、日常生活も充実したものになったのではないか”といった『看護技術を身につける』ことや、“限られた時間の中で、患者の状態を迅速に適切に把握することが課題”“自分の行ったアセスメントに自信が

もてなかった”のような『情報収集・アセスメント能力を身につける』ことといった、看護実践する上での知識と看護技術に関する課題が7項目あげられていた。

「医療チームの役割への課題」は2件あげられていた。“他職種との連携・協働により患者の望んでいる治療やケアに繋げたい”といった『他職種との連携・協働の仕方』などの2項目があげられていた。

「実務に即した実習への課題」は2件であり、“2名の患者を受け持ち、偏らずにどのタイミングで動かか判断できなかった。優先順位を判断するにあたり何を一番と考えて判断するかが課題”といった『行動の優先順位の判断の仕方』であった。

「看護師としての姿勢・態度への課題」は7件あり、その内容は“目の前のことに集中して周囲への気づきが行き届かない”“患者の体力や体調に合わせた援助の配慮に欠けていた”といった『看護援助時に配慮・気づかいをすること』などの3項目であった。

考 察

以上の結果から、学生による実習目標及び到達目標の設定から学生の学びと課題について考察し、今後の

課題として実習評価について考察する。

1. 実習目標の設定について

実習目標に学生全員が、実習内容として示した「周手術期患者の看護、がん患者の看護・急性期患者の看護、慢性期患者の看護」の4つについて、知識と技術を統合するプロセスを体験することによって、質の高い看護の実践について学ぶことを目標としていたことが明らかとなった。学生は個々の課題に即して看護実践に焦点を当て、具体的な到達目標をあげて学ぶことを計画していた。このことから、学生が看護総合臨床実習の概要及び到達目標に示されている「看護実践能力に必要な知識と技術を統合的に体験する」という内容を意識し、自らの課題と照らし合わせて実習目標を立案していたと考えられる。

最も多くの学びがあった看護実践においては、学生全員がそれぞれの目標とするところの学びを得ていた。対象理解において、「患者の気持ちに触れることは難しいが、精神的側面の充足の重要性を考えることができた」と、学生一人ひとりが実習を通して学びを得ていた。しかしながら反面、「患者の思いに寄り添いたくても、思いがわかってあげられないことで精神的側面を把握し支えることの難しさを実感した」という看護実践の難しさも体験していた。坂本(2007)は、統合的な能力をすぐに学生に修得させることは不可能であり、先ず統合的に判断できるためには、事実を事実としてみる能力を身につけることが必要であることを述べている。学生は「知識と技術の統合により質の高い看護を実践する」ことを目標に実践したが、限られた時間の中で的確な情報収集ができない、観察したことが患者の状態からずれてしまい個別性のあるプランが立てられなかった、症状ばかりに注目してしまい全体像が捉えられなかった、といった自分の課題を明らかにしている。今回の実習では「知識と技術を統合し質の高い看護を実践する」までには至らなかったこともあると思われるが、患者に起こっている現実や必要とされる援助の実際と、学生自身の持てる力の限界とそれを埋める課題については学び取ることができたと思われる。

医療チームの役割については、学生それぞれが合同カンファレンスへの参加などを通して他職種との連携・協働の必要性や、看護師の役割などを学んでいた。今回の実習では、医療チームの役割について理解でき

た結果、次の段階として「患者の望む治療やケアが実現できるように協働するにはどうするのか」といった実践レベルでの目標を見出すことができていた。

さらに、看護師としての姿勢・態度では、学生に看護師の責任の意識が芽生えていた。看護師としての姿勢・態度についての学びは、学生に自分自身を振り返るきっかけを与えていた。学生は、自主性の欠如や周囲への配慮の欠如といった自己に気づき、さらに、看護師として自己研鑽の必要性にも気づいていた。これらのことから、看護総合臨床実習が、学生が専門職者としての自覚を持つきっかけになったと思われる。

実務に即した実習については、複数患者の受持ちが初めての体験だったこともあり、時間の使い方、行動の優先順位の判断の仕方、個別の患者への対応や観察の仕方など、多くの学びと課題があった。複数患者を受持った学生は、どのように時間を使って看護実践を行い個別に対応していくかを大きな課題としていた。実習での実践により看護師の優先順位の考えや判断について学び、臨床の場で実践していくことをリアリティをもって意識できたのではないかとと思われる。複数患者の受持ちについては、同時にいくつものことを処理していく能力や、優先順位を判断しながら時間配分を行う能力、チームの一員として行動する能力を身につけられる利点があるといわれている(高谷、菓子、吉田、青木、2007；中山、2007)。今回の実習では、学生25名中15名が複数患者の受持ちを行ったが、複数患者の受持ちにより得られる学びは大きいと考える。限られた時間の中でどのように情報収集を行い、整理・分析していくのか、行動計画の優先順位の考え方や時間配分の仕方、病棟の業務の流れなど、実務に即して実践する考え方や動き方についての事前の学習や、実習中に実習指導者らに付いて指導の機会を得るなどの環境設定が重要である。

2. 到達目標の設定について

到達目標は、学生の実習目標に照らし合わせた内容で、具体的にあげることができていた。特に、2週間という限られた実習期間内であるにも関わらず、学生それぞれが、理解レベル、或いは実践レベルを到達目標として掲げていたことで、実習を行うに当たり到達目標を意識して臨めたのではないかと考える。更に、学生自身が何を目指すのかを明確に示していたことで、評価する際にも到達度が明瞭であったと思われる。

ただし、実習目標の「看護観・倫理観を培う」及び「自己研修力を高める」については、到達目標があげられていなかった。そのため、何をもって目標が達成されたと評価するのか、自己評価・教員評価を含めて評価基準が曖昧になりやすいといわざるを得ない。それ故、実習目標に照らし合わせて到達目標をあげていくよう、教員が助言・指導をしていく必要があると思われる。ただし、「看護観・倫理観を培う」については、実習評価表の「実習のまとめ」のレポートの項目の23及び24に、実習を通して学んだ看護観や倫理観について述べるができるという評価項目があげられている。そのため、レポートで学生が学んだ看護観や倫理観が記載されているかどうか、一つの評価基準にはなると思われる。しかしながら、学生が意図して実習目標に掲げた場合、学生自身の学習状況に応じた到達目標の設定が望ましいと考えられる。

3. 今後の課題

1) 実習評価の項目

実習評価表の「看護の実践」の評価項目の内容は、看護過程に沿った形式とした。学生全員が実習目標に「知識と技術の統合による質の高い看護を実践する」ことをあげ、看護過程を行ったことから、今回はほぼ妥当な評価となったと考える。しかしながら今後、外来での看護実習や手術室での看護実習など看護過程を行わずに実習を展開していく場合、この評価項目の内容での実習評価には限界がある。「知識と技術の統合による質の高い看護を実践する」という実習目標であっても、学生個々により力点を置いている内容や目指している方向が様々であることから、「看護の実践」の評価項目の内容を学生自身に立案させることを、今後考慮していくことが必要だろう。今回学生が実習計画書で立案した到達目標の中には、具体的な行動レベルで目標を掲げていたものが多くあり、これら到達目標を実習評価項目の内容として検討することを視野に入れることも考えられる。

また、複数患者の受持ちにおける優先順位や時間配分の検討、或いは感染予防対策の実施など、実務に即した実習を意識して取り組み、学んでいたが、それらに該当する評価項目が、今回使用した実習評価表には示されていない。そのため今後は、「実務に即した実習」についての評価項目や評価の仕方を検討していく必要があるだろう。

2) 実習評価の評価基準

評価基準については、今回「1点;助言を受けてもできないことがある」「2点;数回の助言でできる」「3点;1回の助言でできる」「4点;学生一人の力でできる」で行った。看護総合臨床実習は、教員の助言・指導のもと、実習課題や目標の立案・設定、実習内容の計画、実習病棟への実習内容の説明に至るまで、全て学生自身が主体となって進められる。学生自身が主体となって実習を進めるのは初めての体験であり、どのように実習を進めていくのか手探りの状態であった。そのため、実習を作り上げていく全ての過程(自己の課題から実習目標を導き出す、目標を達成するための到達目標を考える、目標に沿った実習内容を計画するなど)において、教員によるかなりの助言と指導が必要であった。しかしながら、学生は自己の課題に向き合い、教員の助言や指導を受けながら、それを乗り越えるための実習目標や到達目標の立案、実習内容の計画に積極的に取り組んできた。看護総合臨床実習が、学生の自主性を引き出し、自己研修力を高めることをねらいとしていることを考えると、教員の助言の程度による評価基準ではこの実習のねらいが正しく評価されにくいと考える。学生一人の力でこの実習を作り上げたかどうかという評価基準ではなく、看護総合臨床実習のねらいに沿って目標達成が「できた」～「できない」の段階的な評価基準を取り入れたほうが、実習を評価しやすいと思われる。そのため今後は、実習の評価基準について検討していく必要があるだろう。

3) 実習前の準備

前項でも述べたように、看護総合臨床実習は、教員による指導のもとに学生が主体となって実習を作り上げていく。この実習の仕方は学生にとって初めての体験であり、どのように実習を作り上げて進めていくのか戸惑うことが多かったと思われる。できるだけ学生自身に主体性をもたせ、積極的に実習前の準備に臨ませるようになるために、実習準備の進め方を学生が具体的にイメージし、自ら行動を起こせるように先を見通しながら進められるような実習要項を作成し、実習オリエンテーションを実施することが必要である。先を見通せることにより、学生それぞれの準備状況に応じて、今何をすべきかを学生自身で考えることができ、或いは教員が学生に今何をすべきかを投げかけること

により学生の主体性を引き出すきっかけにもなろう。また、どのような情報や助言があると実習前の準備を進めやすいのか、学生から意見を収集していくことも必要と思われる。そうすることで、学生の主体性を引き出しながら実習を進めるための示唆が得られると考えられる。

研究の限界

本研究は、看護総合臨床実習成人（基礎）看護領域での学生の学びの内容と到達目標の達成度を、レポートの分析を通して明らかにすることを目的としていた。レポートの記述内容から、各自の実習目標及び到達目標に向かって、学生が実習を通してどのような体験をし、どのような学びを得たのかについては分析し明らかにすることはできた。しかしながら、レポートには、実習目標及び到達目標に対し、例えばどの程度の知識や技術の修得したのか、やってみただけなのか、修得したのが明確に記載されていない。また、何をもってして、どこまで到達したという根拠も示されていない。そのため、到達目標の到達度、或いは学生の達成感については明らかにすることはできなかった。学生が、立案した実習目標や到達目標に対し達成し遂げたという達成感を持つことは、次の課題に進むに当たっての原動力や自信につながると思われる。また、目標に対する到達度を明らかにすることは、自分の課題をはっきりさせることに繋がり、学生に対する教育的指導の手がかりになると考える。そのため、今後、学生の到達度については、到達目標に対する到達度についての自己評価及び教員や指導者による客観的評価の導入の検討、学生個々の実習記録用紙、例えばアセスメント用紙や関連図、ケアプラン用紙などの分析の検討などが必要と考える。

結 論

平成20年度の看護総合臨床実習成人（基礎）看護領域での学生の学びの内容と到達目標の達成度、及び今

後の課題について、以下のことが明らかになった。

1. 学生全員が「知識と技術の統合により質の高い看護を実践する」ことを実習目標に掲げて実習に臨んだ。そして、患者に起こっている現実や必要とされる援助の実際と、学生自身の持てる力の限界、それを埋める課題について学んでいた。
2. 医療チームの役割について理解した学生は、次の段階として「患者の望む治療やケアが実現できるように協働するにはどうしたらいいのか」といった実践レベルでの目標を見いだすことができた。
3. 看護師としての姿勢・態度での学びは、学生に自分自身を振り返るきっかけを与え、自主性や周囲への配慮の欠如といった自己の気づき、看護師として自己研鑽の必要性の気づきに繋がっていた。
4. 複数患者を受け持つ体験によって、時間の使い方、行動の優先順位の判断、個々の患者への対応や観察の仕方などの学びと課題を得ていた。
5. 評価表については、「看護の実践」の評価項目の内容の検討、「実務に即した実習」についての評価方法の検討、評価基準の見直しが必要と考えられた。
6. 実習前の準備には、少しでも学生が主体性を持って臨めるように、先を見通しながら進められるような実習要項の作成、実習オリエンテーションの実施が必要と考えられた。

引用文献

- 1) 看護基礎教育の充実に関する検討会（2007）、看護基礎教育の充実に関する検討会報告書、厚生労働省ホームページ、<http://www.mhl.go.jp/shingi/2007/04/s0420-13.html>、（2008/12アクセス）
- 2) 中山富子（2007）、「総合実習」のねらいと実習内容の組み立て、看護展望、32(7)、39-43
- 3) 坂本すが（2007）、臨地実習をどう見直し、組み立てるか—カリキュラム改正の意図を踏まえて—、看護展望、32(7)、12-15
- 4) 高谷真由美・栗子嘉美・吉田澄恵・青木きよ子（2007）、複数患者受け持ち実習と学習効果—成人看護実習における取り組み—、看護展望、32(7)、16-22

LEARNING AND PROBLEMS FROM COMPREHENSIVE NURSING PRACTICE IN THE FIELD OF ADULT (FUNDAMENTAL) NURSING

—BY ANALYSIS OF REPORTS—

Mayumi URUSHIZAKA¹⁾, Kimi KIMURA¹⁾, Chiyo MURATA¹⁾, Reiko NAKAMURA¹⁾,
Mariko HARATA¹⁾, Junko NITTA¹⁾, Shizuko OSANAI¹⁾

Abstract: The purpose of this research is to make clear the degree of achievement towards goal attainment, and content of student learning, in comprehensive nursing practice within the field of adult (fundamental) nursing, and examine the issues to be addressed in the future. The subject of this research were 25 fourth year nursing department students of university “A”, who undertook comprehensive nursing practice in the field of adult (fundamental) nursing. The learning and problems encountered during the practical training have been analysed based on the “practical training plan” and “report on comprehensive nursing practice”.

The results were as follows: (1) Students were learning from the actual care needs and realities of the patient. (2) Students grasping the role of the medical team found the next stage, in terms of their objectives on a practical level, to be “what should I do in order to cooperatively realize the care and treatment as desired by the patient”. (3) Learning about the attitude and manner of a nurse, the students were given an opportunity for self-examination, to notice what was lacking in the attention and consideration being paid towards their surroundings and in their self-initiative, and led them to see the necessity as a nurse for continuous self-improvement. (4) From assuming care over a number of patients, students gained some experience into ways of observing and responding to each individual patient in terms of apportioning time and judging orders of priority. As for points of revision, an examination of the preparations made prior to practical training, and a reexamination of the assessment chart, were proffered.

Key words : comprehensive nursing practice, autonomy, integrating knowledge and skills

1) Faculty of Nursing, Hirosaki Gakuin University

TEL: 0171-31-7156, FAX: 0172-31-7101, E-mail: urushi-m@hirogaku-u.ac.jp